

紹介

京都における羅振玉と王國維の寓居

一九一一年辛亥革命の年、羅振玉は學部の二等諮議官でまた農科大學監督も兼職しており、王國維は北京で學部の名詞館協修という職にあった。十一月袁世凱が内閣總理大臣に再任されたことによって、清朝の情勢は極めて緊迫し騒然としていた。その時日本西本願寺の大谷光瑞は羅振玉に對し、日本へ避難するつもりであれば援助しようという申し出を行った。羅振玉はその時まで大谷氏と交際があったわけではないので躊躇して返事をしなかったのだが、そこへ今度は舊知の内藤虎次郎、狩野直喜、富岡謙藏諸氏から京都へ來てはどうか、藏書は大學の圖書館であずかるし、寓居の用意もしようとの勧誘があったのである。そこで羅振玉は藤田豊八と相談し、彼の意見によって京都へ行く決心をした。

一九一一年十一月下旬（陰曆十月初）羅振玉、王國維及び羅振玉の長女婿劉大坤の三家族二十人餘りが北京から天津へ赴き、十二月初（陰曆十月中旬）温州丸という約千トンの商船に乗り七日後神戸に到着した。彼らは藤田、狩野など諸舊知によって神戸から京都の田中村へ迎えられたのである。當日は狩野夫人が皆のために食事を用意し、住居の掃除もすませてあった。東瀛諸友の情誼に感動した羅振玉は後にこう記している。「諸君風誼、不減古人、終吾生不能忘也」。また藏書及び荷物は本願寺に依頼して京都へ搬送した。

羅振玉はその時點では日本に長く住むかどうかまだ決まかねていたようで、京都に着いて三日の後すぐ中國に戻ってみたが、革命の情勢が完全に醸成され清の滅亡ももう免れない大勢を目にしたため、北京の官職を辭して京都に引き返し、一九一一年十二月初旬から一九一九年五月までほぼ七年半にわたる彼の長い京都生活が始まったのである（王國維は方の一九一六年二月まで四年二ヵ月京都で暮らした^①）。

(一) 田中飛鳥井町の羅振玉の居

初來日の十二月初から一九一三年一、二月に淨土寺の新築家屋に移るまで羅振玉及びその家族は田中の家に住んでいた。

羅振玉の寓居の所在地は現在の左京區田中飛鳥井町四十三で、現在外村晃という表札のかかっている所である。寓居の具體的な場所は狩野直喜教授の令息狩野直方氏の御教示を受けて初めて明らかになった(狩野直方氏には一九九三年二月二十一日お話を直接伺う機会を得たのであるが、同年七月、九十二歳で亡くなられた)。狩野直方氏のお話によれば當時以來の家の所有者外村氏は室町で呉服屋を営んでおられ、田中の家はおそらく別邸であったとのことである(京都地方法務局左京支局にある舊土地臺帳によれば、大正三年一月十九日まで、その土地の所有主は佐竹元太郎であったが、同日に所有権を外村宗治郎に移轉された)。その家屋は羅振玉が來日する前からあったものである。羅振玉達が田中にいた時狩野直方氏はまだ小學校の四年生であったが、しばしば父上の手紙を

紹介



地圖一：(昭和四十九年精密住宅地圖による)

持って羅振玉の家にお使いに行かれたのことで、鮮明にその家のことを覚えておられた(所在地について附録の地圖一を参照)。狩野直喜教授の田中大堰町の故居には今もそのまま長孫の狩野直禎氏一家が住んでおられるが、そこから羅振

玉の借家まで歩いてほんの三四分程度の距離しかない。直方氏のお話しては、狩野直喜教授と羅振玉、王國維達との交際はかなり頻繁で、お互いに手紙をやりとりするほか、お互いの家にもしょっちゅう行き來があったという。羅振玉は日本語ができなかったが、王國維は日本語を話せるので、時々臺所で母（狩野夫人）と日本語でおしゃべりしているところを見たこともあったという。また羅、王兩氏は勿論辯髪で、清朝舊式の長袍をきていた。羅がいつもいい服装を着てきちんとした姿であったのと對照的に、王は白い長袍であまりおしゃれではなかったらしい。直方氏の長男狩野直禎教授に案内され羅振玉の借家であった外村氏の家屋の概觀を視察した。今も庭つきの廣い日本式家屋であるが、昔はもっと廣かったらしい。現在の敷地は昭和十二、三年頃から第二次大戦後にかけて、東大路の擴張に伴い東側がかなり削られはしたものの、現在残る東側の二階建の建物は當時以來のものだそうである（以上は狩野直禎教授の御教示による）。

羅振玉の田中の借家の様子及び住所について、王國維、

羅振玉の文には「田中僑寓」というより詳しい記録は見えず、また彼らに關する年譜及び傳記資料でも同じである。

日本側の文獻資料では貝塚茂樹著『古代殷帝國』に、「京都では京都大學近くの田中村（今の左京區田中飛鳥井町）に家が借りてあり……」^②とあるものと昭和二十六年大阪で開かれた「王靜安先生を追想す」の會談記録が最もまとまったものである。^③中國側には現在一次資料は存在しえず、文獻記録も全くないと思われていたが、繆荃孫の日記を讀むうちに偶然にも辛亥十一月二十日（陽曆一九一二年一月八日）の所に「接羅叔蘊信云住日本西京田中村大字流田四番地」という記事を發見した。^④これは今まで知られていなかった記事である。

ところが「田中村大字流田四番地」という地名は現在存在しない。大正七年八月五日田中村が京都市上京區（現左京區）に編入された際に田中村大字田中字流田は田中門前町に合併され、字流田四番地は田中門前町三十八番地に變更された。昭和三十五年三月二十九日、區劃整理の換地處分によって、田中門前町三十八番地は更に今の飛鳥井町四

十三番地にかわつたのである。^⑤

(二) 百萬遍の王國維の居

一九一一年十二月初京都に着いた當初、王國維一家及び劉大千一家は皆田中の羅振玉の借家にしばらく住んでいたが、全部で二十人餘りもいて手狭なため羅振玉はまもなく別に二軒を借りて王、劉一家を住ませた。そこで王國維は田中百萬遍に移り住むことになったのである。引越したのは一九一二年一月中旬頃^⑥、その年には鈴木虎雄、西村時彦、青木正兒、本田成之など大勢の京都大學の教官および學生がその家に足をはこんだのであった。

百萬遍王國維の借家の場所についてはいろいろな説があるがまず鈴木教授の談話から見てもみよう。

日本に來られて間もない時のことでありますが、田中の百萬遍の中華料理店(今の「神海樓」)から一二軒隣りへ引移られ、その引越のごたごたの最中に訪問しました。それから間もなく王先生は百萬遍のお寺の左の怪しげな日本家屋に移られそこに長く住まはれました。

紹介

(『懷德』第二十二號、昭和二十六年)

鈴木先生の談話によると百萬遍の家は二箇所あり、一つは百萬遍の中華料理店(昭和二十六年の「神海樓」、おそらく次の本田成之氏の述べる支那料理屋と同じ)の隣で、もう一つは百萬遍の知恩寺の左側である。明治四十五年(大正元年)鈴木教授はしばしば王國維と詩の唱酬をし、手紙も書き、また王國維の著作『簡牘檢畧考』、『古劇脚色考』などを和譯して『藝文』に載せるなどして王國維との個人的な交際の最も多かつた人物である。鈴木教授の王國維の寓居が二箇所あつたという話しには間違いがないはずであるが、多數の人々によく覚えられているのは當時の東大路の西側であつたと思われる。例えば本田成之氏は次のように書いている。羅氏は堂々たる家を借りて住んでいたが王氏は今の支那料理屋になつている百萬遍西門前の所で佗住居をして居られた^⑦。

また青木正兒教授は次のように記している。

田中村百萬遍郵便局の横を少し北に入ると、西側に杉垣を圍らした二階建ての小家が三軒並んでいた。確

か其の眞中が王先生の寓居であつた。^⑧

當時の東大路の幅は二メートル程しかなかつたから本田氏が述べた「百萬遍西門前の所」というと東大路の西側のことと理解することもできる。^⑨ 狩野直禎先生も現在百萬遍東大路の西側（知恩寺西門の向かい側）にかつて支那料理屋があつたと言つておられる。

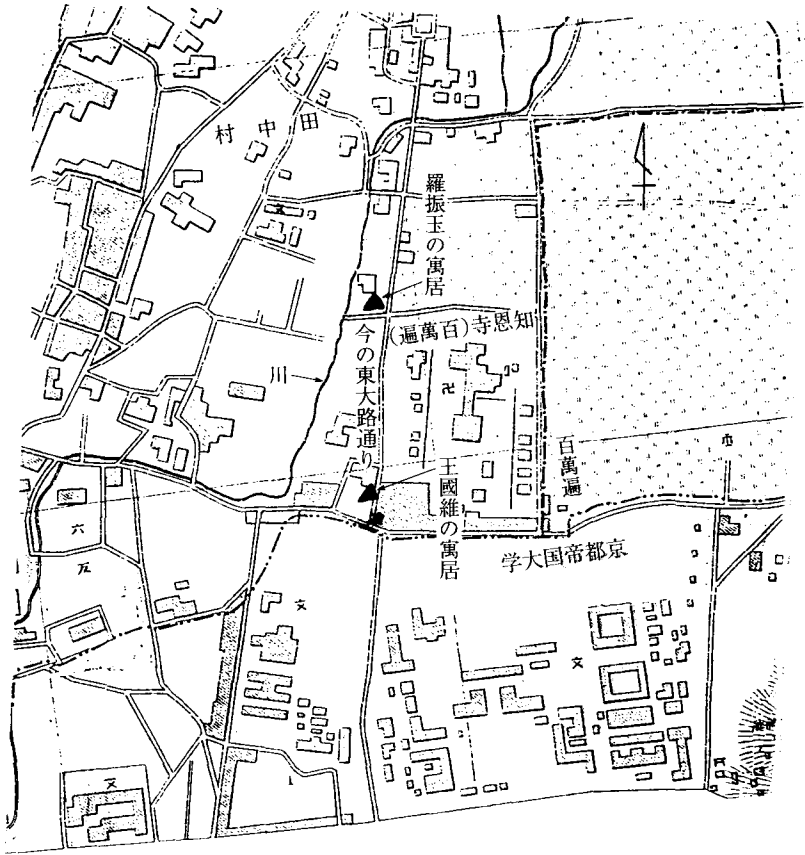
百萬遍郵便局は何回も場所を移しており、大正十一年頃は今の第一勸業銀行の西隣、昭和七年頃は今出川通りと東大路の交差點西北角に移され、また昭和十二年末東大路に電車を通らせるため道路擴張した際に今の場所、交差點の東北角に再び移されたのである。昭和十二年五月に青木教授が上記の文を發表した時は百萬遍郵便局はちよつと交差點の西北角にあつたはずである。

鈴木教授の談話にみえる二軒の家の關係は明らかにできないが、以上からわかる限りのことをまとめて見れば、百萬遍の王國維の借家の一つは知恩寺の西門の向側で當時の東大路の西側にあつた。現在の東大路は以前より十倍程擴張されたものでそのため舊來の建物もなくなつてゐる。か

つての王國維の住まいは恐らく現在では東大路の中に取込まれてしまつたと考えられる。このような推測は狩野直方氏の記憶とも一致するものである。

直方氏自身は直接に百萬遍の王國維の寓居に行ったことはないが、その近邊の小川邊で洗濯をする王家の人を見たことがあるという。

贅言すれば田中村は大正七年まで京都市にまだ編入されておらず愛宕郡に屬し、東は白川、西は高野河原に、北は一乗寺、南は吉田の各村と接していた。大正二年の京都市街圖に見える小川が田中村の中央を通り（地圖二参照）、また地圖には見えない流水も多く縦横に交錯してゐたさうである。白川の邊よりは人家も多くなつてはいたがやはり田畑が主の田園風景であつただろう。田中村に居を決めたばかりの王國維は「近市一塵仍遠俗、登樓四面許看山。書聲只在淙淙裏、病骨全蘇紫翠間。」と書いてゐる。^⑩ また明治四十五年の春に京都に來て田中村の王、羅二氏の近所に居を決めた羅莊（羅振玉の季弟羅振常の長女）も「溪流新漲活、籬落野花榮」、「茅簷朝日永、戶外看春耕」（卜居西京田中村



地圖二：(大正二年京都市街全圖より)

宿雨初晴臨窓四望野色殊可怡悅」、また
 「高原聯歩近黃昏、蚱蜢驚飛度遠村、
 秋稼登場田野闊、夕陽明處見柴門」
 (遊田中村偕弟妹晚歸)などの詩を作
 っていた。^⑩

大正元年頃京都府に在留する外國
 人の數は今よりずっと少なかつたの
 は勿論であるが、やはり中國人が其
 二分の一を占め最も多かつた。大正
 四年京都府が編纂した『京都府誌』
 に次のような記事がある。

府下に在留する外國人の總數
 は、大正元年末現在二百十人戸
 數五十九にして、京都市内に在留
 の百七十八人其の戸數五十二戸
 最多く、愛宕郡の二十八人其戸
 數四戸之に次ぎ……(上第三編第
 十一章)

狩野直方氏のお話しによれば當時そのあたりに羅振玉、王國維達を除けばまったく外國人の姿は見られなかった。

そうだとすると『京都府誌』の「愛宕郡の二十八人其戸數四戸」という統計はおそらく羅振玉、王國維、劉大坤、羅振常のことを指しているのではないかと思われる。羅、王、劉三家が二十人くらいで、後の羅振常一家とあわせれば人数もほぼ符合する。

(二) 「永慕園」——羅振玉邸宅

羅振玉は田中村の借家に一年餘りいたが、藏書が全て京都大學圖書館に置かれていたため毎日王國維と一緒に大學に通い整理を行っていた。しかしそれは非常に不便でしかも疲れるということで、藤田豊八教授の名義で(外國人は日本で土地を買うことができなかった)淨土寺の四百坪の土地を購入し、廣々とした邸宅を新築した。顔之推「觀我生賦」の「與神鼎而偕没、切仙宮之永慕」の句から「永慕園」と名づけ、書庫も建てて大學へ寄託していた藏書を移し、藏書の中に北朝初年の『大雲無想經』寫本があるので「大雲

書庫」と名付けた。また庭には小さい池があった。それができあがった時、當時の清史館總裁趙爾巽が羅振玉への清史館職の招聘狀を送って來たのだが、羅振玉はその書狀を燒き、池を「洗耳池」と名付けている。そして京都大學から講師として招聘されもしたが堅く辭退し、著述に専念した。^⑭淨土寺で居を構えたことから羅振玉には日本に長く住もうという意志のあったことが窺えるが、次に引く繆荃孫宛の書簡にその動機的一端を知ることができる。「玉海外餘生、所以久久不歸者、蓋亦以賦性狷隘、其不能容於今之世必矣、故寧瑣尾流離而不悔」^⑮。

羅振玉が淨土寺の新居に移ったのは一九一三年一〜二月の間であるはずである。一つには王國維の「壬子除夕前一夜」附(『王國維全集書信』第三十五頁)繆荃孫宛書簡の後にある「蘊公移居在京都上京區淨土寺町字馬場八番地」という記事から居を移したのはおそくとも一九一三年二月四日(陰曆一九二二年十二月二十九日)以前であり、また董康の一九一三年一〜二月間の繆荃孫宛書簡に「叔蘊新構落成、刻在遷移之際」と書かれたものがある。^⑯董康は書簡の日付な

どはすでに陽曆で記していたので、羅振玉の移居は早くとも一九一三年一月一日以後であるはずなのだ。

「永慕園」で羅振玉は多くの仕事をし、とりわけ甲骨文字の研究と出版に非常にすぐれた業績を挙げ、一九一九年五月歸國までそこで過ごした。「永慕園」は羅振玉の自宅ではあったが、五十萬卷と稱せられる藏書及び彼の一番の寶物である龍骨と三代古器物、また數多くの書畫などもそこに藏されて、一つの博物館とも言えるものであった。王國維は勿論それを圖書館及び研究の場所としてよく利用したのであり、またそこで『流沙墜簡考釋』、『齊魯封泥集存』、『殷墟書契前編』釋文など羅振玉との共同作業も多く行ったのである。後に羅守巽（羅振常の三女）が回憶しているが、王國維は毎日出勤するように朝から「永慕園」へ行って羅振玉とともに研究をしていた。^⑤ また王國維だけでなく、富岡謙藏、小川琢治、梅原末治、神田喜一郎などの京大關係者も誠に頻繁に「永慕園」に出入していたそうである。梅原末治氏の話では「羅先生のお家には私どもには不思議なほど澤山な人が居られた……」（注釈④と同じ資料）とあるよ

うに「永慕園」は京大の東洋學者を中心とした京都のひとつの學術サロンともなっていたのではないかと思われる。

大正八年五月歸國の際、羅振玉は「永慕園」を京都大學に寄附して、日本に存する唐鈔本を景印することを内藤虎次郎、狩野直喜兩教授に依頼した。「永慕園」は後に二萬三千圓で賣られ、京都大學文學部景印唐鈔本が出版されたのであった。

「永慕園」は昭和十年頃京都市の洋傘屋「田中久商店」によって購入され、羅邸はとりこわされて新たな家屋が建てられた。これが現浄土寺東田町一番地にある「碧光園」の建物である。昭和二十八年その敷地及び建物が日本專賣公社（現在の日本たばこ産業專賣會社）にそのまま買われ、現在でも次のような改造を除けばほとんど「田中久商店」が建てた當時のままである。異なる點は現在の二階の小部屋はホールになっていたこと、特別室には茶席があったこと、昭和三十四年に應接室を改造したこと、昭和三十七年に離れを建築したことである。^⑦

今の「碧光園」は新築當時「吉田御殿」と言われたほど

のすばらしい和風建築であるが、これで「永慕園」のもと
の姿は永遠に取り戻すことができなくなった。「永慕園」で
生まれ満六歳までそこに住んでいた羅振玉の長孫羅繼祖氏
は一九四二年冬から一九四四年の秋まで、京都大學文學部
講師兼東方文化研究所囑託として日本に滞在したおり、幼
少時に見た舊宅の「永慕園」を見、後に次のように書いて
いる。

私はかつての舊宅の門前を徘徊して、子供の頃の記
憶を呼び戻し、その證據を探そうとしましたが、舊宅
は新しい主人の改築を経た後で、すでにたまたまは
すっかり變わっているのを感じました。⁽¹⁸⁾

羅振玉がいた當時の「永慕園」の姿を見た人は今ではお
そらくいないだろうが、大正の末頃つまり建物がまだ改築
されていない時の様子を見た人がいる。その一人は大正七
年生まれ、安西春吉氏で、幼少の頃より長谷川造園で働き、
「永慕園」が改築された際に造園の手傳いもしたのである。
安西氏の追憶を要約すれば次のようになる。大正十四五年
頃、「永慕園」であった家のまわりはまだ田畑ばかりで、人

家がなくぼつんと目立つ存在であったという。其の家の前
に細い小路があつて小學校に行くために氏は毎日通つてお
られた。その時の家屋は今程立派でなく、いくつかの建物
が分散されて庭の少々西側にあり、池もちゃんとしたもの
でなく、ただ水が流れてたまった溝にすぎなかった（その
邊はかつて水の多いところで地面を二尺くらい掘れば水がすぐ
出てくるのであつた）。またその時の家は今のようにならな
く、煉瓦垣で圍まれておらず、まわりに樹木がすこしあつ
ただけなので中が見えた。昭和十年頃改築するまでそこに
ずっと十人餘りの中國人の家族が住んでいたが、年輩の人
は民族衣装をきて辮髪であつたものの、若者は日本の普段
着を着て日本語も話せるので、日本人とあまり變わらな
かつた。その中國人達は皆京大關係の學問のある人らしく、
彼らから書を貰つた住民もあり、安西氏自身も彼らと話し
たりお菓子などを貰つたことがある（その家屋は當時かなり
目立っていた）。後にもとの家屋は突然取り壊され立派な邸
宅が建てられた。煉瓦垣は更に後になって道路を擴張する
時に作られたものである。今の「碧光園」の庭の松は昭和

十年頃改築したとき植えられて、當時は直径十センチほどの小さなものであった（羅振玉が植えた松はもう残っていないらしい）。

以上が「永慕園」の大體の沿革である。羅振玉はこよなく「永慕園」を愛して、其の中の建築に「宸翰樓」、「夢鞆草堂」、「雲窓」、「雲峰精舎」、「吉石庵」、「四時嘉至軒」などの名を付けており、終生忘れられない記念物であったことが窺える。

(四) 神樂岡の王國維の居

羅振玉が浄土寺の新居へ移轉するのに従って、王國維も一九一三年三月十四日吉田町神樂岡八番地の借家に引越した。そのことについて繆荃孫宛三月二十六日（陰曆癸丑二月十九日）の書簡に王國維は次のように書いている。¹⁹

半月以後、移居吉田町神樂岡八番地、背吉田山、面如意嶽、與羅重二公新居極近、地亦幽勝、惟去市略遠耳。移居以後、日讀注疏一卷、擬自三禮始、以及他經、期以不間斷、不知能持久否。

紹介

だが、羅振玉が繆荃孫に宛てた三月十三日（陰曆二月六日）附けの書簡にはまた「靜安兄明日亦移居侄之左近」と書いているのである。「明日」というのは三月十四日（陰曆二月七日）であるから、上記の王氏書簡の「半月以後、移居……」は「半月以前」のことであるはずで、また手紙の語氣及び「移居以後、日讀注疏一卷」の文脈を見てもその手紙が移居した後に書かれたことは間違いない（ただそれが王國維の筆誤か『王國維全集書信』の録誤かは不明である）。

一九一三年頃から王國維はほとんど毎日「永慕園」に出かけ、日本の知友達も用事のある場合、羅振玉邸に行くとなりに會えるので、神樂岡の王國維の家を訪れた経験のある人はあまりいないようである。

神樂岡八番地は、現在朋友書店横の小路の起點から小路沿いに吉田山を登り、「碧光園」のちょうど斜め向かいあたりの斜面までに該当する。前記の王國維書簡の「背吉田山、面如意嶽」と羅振玉書簡の「移居侄之左近」の記事、また大正二三年頃にはそこしか家屋がなかったことにより、王國維の神樂岡の家の場所は現在の「碧光園」西方の向かい

側であつたと推測できる。

其の近所に董康（眞如堂町）、羅振常及び劉大坤（神樂岡）も住んでいた。當時の其の邊りの環境について羅振常の長女である「文學少女」の羅莊の詩詞や散文にしばしば書かれていたので、その一斑を拾つて見てみよう。

新由田中村移居神樂岡、岡之前後皆山、開軒排闥、
綠滿青連、景色逾于舊居。（詩序『初日樓正續稿』）

また

其地風景幽勝、氣候適中、小樓一楹、僅堪容膝、而
纖塵不染、席地憑几、猶然古風。窗外山光嵐氣、朝暉
夕陰、奇瑰不可名狀。繞屋則溪流如帶、日夜潺潺。比
屋而居者、有劉季櫻姉丈（大坤）、王靜安姻丈（國維）、
二家多僕媪童稚、隔籬呼答、悉作鄉音、頗不岑寂。
（『初日樓遺稿・海東雜記』）

前にも述べたように神樂岡に轉居してから王國維は毎日「永慕園」に行つて羅振玉とともに研究に打ち込んでいたが、この頃から彼は専ら經史、金石甲骨文に關しての研究を始めた。當時、王國維は自らの預金をほとんど使い果た

していたので、羅振玉の『國學叢刊』の編集に職を得、月に二百圓を貰つて暮らしていたのである。當時の二百圓は日本圓ではおよそ百六十圓にあたり（その頃大學教授の月給は七十圓、政府機關などの職員は十五〜三十圓、講師は二十五圓餘りで、最低水準の生活は十圓でも維持できた）、日本で生活するにはまったく問題がなかつたはずである。故に一九一六年二月（陰曆正月）に歸國するまで王國維は日本で研究に専念することができ、ややこしい人間關係もなく、心の通じ合う東瀛の友人も大勢いて、あたかも羅莊が後に述べる「故郷俶擾、不見不聞、堪稱世外桃園矣」のような扶桑歲月を過ごしていたと言えよう。また王國維自身も「生活最爲簡單、而學問則變化滋甚、成書之多、爲一生之冠」と述べているように日本の滞在に深く満足していたようである。²⁹

以上のように京都における羅振玉、王國維の寓居の昔と今の狀況を調査した結果を報告する。これからさらに羅、王の日本における事績と日本との關係について調査研究していく予定である。

注

① 以上諸事は主に羅振玉著『集蓼編』（『羅雪堂先生全集』五編（一））；狩野君山博士六十壽序（同上續編（二））；滿州寫真帖序（同上初編（七））；王國維辛亥十二月初一（陰曆）致繆荃孫信札（『王國維學術研究論集』第三輯、蔡美彪「王國維致繆荃孫信札兩通」による）。

② 貝塚茂樹著『古代殷帝國』Iの七「龍骨海を渡る」第四十三頁（みみず書房、昭和三十三年二月）。

③ 『懷徳』第二十二號（懷徳堂堂友會「王靜安先生を追想す」の中に梅原末治教授の以下のような追憶がある。「：（明治）四十五年の初めの頃でしたでしょう。支那の有名な學者が來てゐるといふので、百萬遍近くの田中村へその家を見に行つたことがあります。その家の事は今もはつきりと記憶してゐます。南に門があつてその前に東西に小川が流れて居り、小さな橋がかかつてゐる。門のうちは庭になつて奥に平屋の家があつた。近接して家はなく東側に田中神社への道があつたので、そこから中の様子を見て歸りました。たしか外村さんと云う人の別荘と聞きました。」田中村寓居の場所について梅原教授の描寫は最も具體的であるが、彼が指していた王國維の住所は實際は田中の羅家のことであつて、王國維がまだ百萬遍に移居していなかつた時であるに違ひない。座談會のこの部分では梅原教授の發言は諸先生の話しとは少し食い違つてゐるようにおもわれる。例えば

鈴木 百萬遍の家では、王さんは祖先の命日には床の間の壁に肖像をかけて祭つて居られました。

神田 田中村は今はずつかり變つてゐますが、百萬遍の西横の電車通りの邊りですわね。

梅原 いまの狩野先生のお宅の少し上手にある變電所の東側であつたと記憶します。

のように、鈴木、神田兩氏は王國維の百萬遍の寓居について述べ、梅原氏は飛鳥井町の羅家について語つてゐるという具合だ。この結果、羅家と王家は混同されがちであつたが、狩野直方氏のご教示により誤解を解くことができたのである。

④ 『藝風老人日記』六第二四〇頁（北京大學出版社一九八六年）。

⑤ 『京都市告示第三〇六號』町名變更調書（大正七年、京都市役所區政課存）；『京都市告示第三七三號』（昭和三十五年『京都市公報』號外第一〇九號）；『東第二地區町名地番新舊對照』（昭和三十五年三月二十九日、京都市役所區畫整理課存）。

⑥ 王國維十二月初一日致繆荃孫信札（同注釈①）の後に鈴木虎雄氏への唱酬詩「定居京都奉答豹軒先生枉贈之作并東君山湖南君攜諸君子」が附され、その一句は「他年第一難忘事、祕閣西頭是敝廬」に「寓居正對大學圖書館」と自ら注してゐたことから、この詩は王國維が百萬遍に引越して後、十二月一日（陽曆一月十九日）前に作られたはずであつて、王國

維の移居時間もそれによって大體分かるのである。

王國維の書簡につき、中華書局一九八四年に出版された『王國維全集書信』は最も基本的な資料であるが、書信に對する鑿年には再検討し直すべきところがあると思われる。例えば、一九一一年冬〜一九一六年春異國の日本に滞在していた期間に日本の友人とお互いに手紙のやりとりをしていたのだが、それらの手紙の日付について『王國維全集書信』は全部陰曆として扱っている。しかし王國維は生涯基本的には陰曆を使い、最後の遺書も陰曆で記してはいるが、日本にいた間必ずしも陰曆を用いたとは限らない。例えば鈴木虎雄宛書簡の日付は基本的に陽曆だと見なすべきではないかと思う。

ここで一例だけ挙げて説明したい。

鈴木虎雄宛「明治四十五年七月二十九日」(『書信』第二十七頁) 書簡の日付は王國維自ら記したものであるが、これは陰曆ではなく、陽曆であることが明かである。理由の一つは明治天皇が明治四十五年七月三十日に崩御され、同時に大正と改元されており、もし「七月二十九日」を陰曆と見なせば陽曆では九月十日ということになり、もう明治ではなくなってしまうのである。王國維の他の書簡資料を扱う時にも陰陽曆のことに注意を拂わなければならないことが明かであろう。

⑦ 本田成之「憶王國維氏」(昭和二年『藝文』第十八年第八號、京都文學會)。

⑧ 青木正兒「王靜庵先生の追憶」(一)「初對面」(昭和十二年

五月「中國文學月報」、『青木正兒全集』七)。

⑨ この邊の地理的な解釈には木津祐子氏に多く助けて頂いた。
⑩ 『愛宕郡誌・田中村・用水川』(明治四十四年)「修學院村字一乗寺より來本村の中央を過ぎ市郡界に到鴨川に入る廣十二尺許深一尺許」。

⑪ 王國維「定居京都奉答約軒先生枉贈之作并柬君山湖南君攝諸君子」(『藝文』明治四十五年第三號)。

⑫ 羅莊「初日樓正續稿」。

⑬ 羅振玉『集蓼編』及び王國維「醉司命日」の日附の繆荃孫宛書簡(『王國維全集書信』第二十四頁)。

⑭ 羅振玉十一月十六日(未署名)繆荃孫宛書簡(『藝風堂友朋書札』下、第一一〇五頁、上海古籍出版社一九八一年)。

⑮ 董康の繆荃孫宛書簡(注釈⑭と同じ、第四四三頁)、この手紙も年月が明記されていないが、文中記載の諸事によって年月を推測することができる。例えば、「又前在北京購獲『永樂大典』十七冊、董康が『永樂大典』を買ったのは一九一二年十月〜十一月のことなので此手紙はその以降に書かれたはずである。又「久違鄉里、三四月間思至常州一省先隴、懲於去歲北京之游、共費七千餘圓。」によって更にこの手紙は一九一三年一月一日後、三月前に書かれたものであることが分かる。

⑯ 羅守巽『回憶王觀堂及其一家』(陳鴻祥『王國維年譜』齊魯書社一九九一年)；「斯時永慕園已建成、則相距頗遠。但面臨

稻田、甚空曠、登樓可見。有一條大路、中過百川相至馬場橋、經一田坡卽達、若沿路走則須繞一竹林、遠多矣。觀堂每晨必由直路至永慕園、象上斑一樣、穿上白、下淡青兩折圓長衫、頭帶辮髮、至伯父家、共研文史、僕輩則稱他爲「王老爺」。

⑰ 興膳宏教授の紹介によって伊藤亞矢氏から得た日本たばこ産業共済組合編集「碧光園」改築資料による。

⑱ 羅繼祖「京都雜憶」(一)「書論」第十八號、東京堂一九八一年春)

⑲ 『王國維全集書信』第三五頁、本文にはただ「十九日」と日附していたが手紙の内容によって二月十九日(陽曆三月二十六日)と推測できるのである。

⑳ 趙萬里『王靜安年譜』(『王觀堂先生全集』册十六、文華出版公司、民國五十七年。)

(京都大學 錢 鳴)